

# 平穏死はむつかしい

「生と死を語る会」代表・坂口内科 院長

坂口 健太郎

坂口 健太郎（さかぐち けんたろう）

平成7年より和歌山県紀の川市にて、尊厳死やがんの最後を自宅で迎える在宅ホスピスについて取り上げている「生と死を語る会」を主宰。

人は誰でも自分の理想の最期を迎えたいと思うのではないだろうか。自分の納得した形で、周囲の人々に見送られたいと願うのではないか。「平穩死」という言葉もそんな感覚で世間に流布しはじめていると思っていた。

しかし老人福祉施設(特別養護老人ホーム)で超高齢者の医療的なお世話をしている私は、いまだ大きな壁にぶつかっている。私が考える「平穩死」は世間一般からズレているのではないかと心配している。

九十歳過ぎの男性入所者が食べなくなつた。認知症の終末期にはよくみられる。食事量が減つてきたことを家族に伝えると「おじいちゃん、あんなに元気だったのに、なんで？ 食べられないのなら点滴してくれませんか」との返事が返ってくる。その場合、私は家族に向かって、認知症の末期で食事が摂れなくなってくるのは自然な流れであつて、昔からよく言われる老衰のひとつですよ、と説明する。そして徐々に食べなくなつてゆくのは本人にとつてそれほど苦痛ではないと思います、と付け加える。また特養では点滴治療はしていないことも伝える。

すると息子さんからこんな反論が返ってくる。「はあ？ 死なせる気かい。先生、人間死んだらおしまいやで。食べないなら点滴するのが当たり前やろ。点滴してくれやんのなら病院に入院させるわ。紹介状を書いてください」と。私は素直に紹介状を書くことを約束する。そして入院先の病院探しにくたくたに疲れてしまいます。(なぜか？は、また後日)